

### 本気で文学を学ぼう

「季刊遠近」は二〇二〇年三月に七三号を発行したが、創刊は一九九六年一月である。  
 確かあの年もネズミ年だった。そしてその頃、私たちが指導して下さった文芸評論家の故久保田正文先生もネズミ年だった。発足の時、こんな偶然を面白がったのを覚えている。

それまで「よんかい」という同人雑誌を出していた仲間が、声をかけ合って集まったのである。中には短歌や俳句を楽しんでいた人もいたが、この雑誌は小説と随筆、評論等、散文に限ろうということになった。いわゆる文学好きの仲間が集まるサロンのような場ではなく、本気で文学を学ぼうという仲間の真剣な研鑽の場にしようではないかという意気込みだったのである。内容は公序良俗に反しない限り、どんな思想を盛り込んでもよいが、あくまでも人間を追究するものでありたいというのが、同人たちの熱っぽい理想であった。

「遠近」という誌名は、久保田先生が考えて下さったもので、今でも私たちは先生の遺産として誇りに思っている。



招待客を迎える勝又先生



「私小説千年史」出版記念会に参加した人々

表紙は、当時現代美術家協会の代表であった難波田元氏が船出へのお祝いとして描いてくれたもので、以来季節ごとに色を選んで使っている。

二年目の九八年、六号で「久保田正文研究」を特集。紅野敏郎先生が御寄稿下さったり、大正大学の小嶋知善先生が久保田先生の正確な著作目録を作って下さった。何より話題を集めたのは、先生が七二年に冬至書房から出された小説「冬のランプ」を転載したことで、各方面から思いがけないほど注文が来たのには驚いたものだ。

米寿のお祝いの後間もなく病に倒れてからも、先生は病床から毎回作品の批評を書き送って下さった。同人たちは合評会の度に先生から送られて来る温かい手紙と厳しい批評文によって、どんなに励まされたかしのれない。二〇〇一年の六月、そんな久保田先生がついに亡くなり、九月に出た一六号は追悼号となった。

その後を引き継いで、「遠近」の面倒をみて下さることになったのが、勝又浩先生である。勝又先生は当時まだ法政大学で教鞭をとっておられたし、文芸評論家としてもお忙しかったが、恩師であった久保田先生の推薦でもあり、同人からの熱心なお願いを断り切れずに応えて下さったのである。お忙しい中、今も三か月に一度くらいの割で「遠近」の例会に参加して下さい、作品の批評その他色々ご指導をいただいている。

勝又先生のご著書は数多いが、やまなし文学賞を受賞なさった「中島敦の遍歴」や和辻哲郎文化賞を受賞された「私小説千年史」は記憶に新しい。また水声社から出版された「山椒魚の忍耐」は、井伏鱒二生誕一二〇年、没後二五年を記念する興味深い本である。

ご執筆のほかにも、一九九一年から二〇〇八年に同欄が廃止されるまで、大河内昭爾氏らと「文学界」誌の「同人雑誌評」を担当されていた。またこの時の四人の担当者を中心に、同人雑誌と文壇を繋ぐパイプとなることを目標にした雑誌「季刊文科」を一九九六年に創刊、今日に至っている。

現在「遠近」の正会員は一四人、購読会員は一六人である。「季刊」と謳ってはいても、実際には年三回しか出ない年もある。が、月一回の合評会は休まず続けている。原則として毎月第一土曜の午後一時、場所は都営新宿線船堀駅前の「タワーホール船堀」（江戸川区船堀四・一・一電話〇三・五六七六・二二二一）の会議室である。少々の雨なら傘が要らないという便利な場所だ。会の後は同じビル内の和食レストランで会食を楽しんでいる。

会費は、正会員が年三万円、購読会員三千元、作品掲載料は一ページ一四〇〇円。事務局がしっかり管理されている。

同人の活躍について述べれば、二〇一八年に河村陽子が

水声社から作品集「林」を出版したのを初め、花島真樹子が鳥影社から「忘れられた部屋」、木野和子が鉾脈社から「おじよん」を出版。難波田節子は「雨のオクターブサンデー」「晩秋の客」（鳥影社）「太陽の眠る刻」（おうふう）その他を出版している。なお「季刊文科セレクション」大第一集には、難波田節子の「紅い造花」が、第二集には花島真樹子の「鏡の中」が掲載されている。

今回「全国同人雑誌優秀賞」に選ばれた小松原蘭は、過去「よんかい」や「河」に多くの作品を発表しており、「遠近」にも瀬良有為子というペンネームで書いていたが、育児のために一時退会、一七年に復帰。「川向うの子」「西大門」。「SPARROW」ほか、各号にユニークな作品を発表して注目されている。今後ますますの活躍を期待できる作家である。

（文責／難波田節子）

遠近の友

TEL 045-904-0245

神奈川県横浜市青葉区荏子田二・三四・七

江間方

TEL 045-904-0245



歓談する会員

